

まえがき

本論文は筆者がこれまでに発表してきた論文のうち、日本語の類型に関するものを集めたものである。われわれ日本人にとって「日本語というのはどのようなタイプの言語なのか？」という問題は当然のことながらおおいに関心のあるテーマである。まず日本語が英語とはだいぶ異なったタイプの言語であることは誰しもが知っている。近年は朝鮮語^{*1}が身近になり、日本語と朝鮮語の対照研究が進展してきたこともあって、特に文法の面で朝鮮語が日本語にきわめてよく似た言語であることが知られてきている。これに対してトルコ語などをはじめとするチュルク諸語やモンゴル諸語、ツングース諸語からなるアルタイ諸言語となると、名前は知っていてもどんな言語であるのか実態を詳しく知っている人はあまり多くない。ただ歴史の教科書などに「日本語はアルタイ語族に属する」などとあっさりとしてあるために、多くの人が「きっと日本語によく似た言語なんだろうな」と考えているようだ。しかし、(歴史的な起源はいったんさて措き、現在共時的に) いったいどのような点が、どのぐらい似ているのだろうか？

筆者は研究の当初よりこの点に興味を持ち、2003年に「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」という論文を発表した。この論文は、まだ明らかになっていない点を含め、なるべく広く多角的かつ全体的に、これらの言語を対照しその異同について考えたものであった。これは筆者にとってその後の研究のため的一种の見取り図のようなものとなり、その後は、この論文発表の時点で研究が不十分であった点や、取り上げきれなかった点、未解決の問題などについて少しずつ整理したり研究し解明するという作業を行って来た。その現時点での集大成がこの論文集であるということが出来る。

^{*1}本書では、朝鮮半島および中国東北部に分布する言語の名称として「朝鮮語」を用いることにする。

本書とおなじく三省堂刊の『言語学大辞典 第6巻 術語編』において、おそらく河野六郎先生の筆になるものと思われる「アルタイ型言語」という言語類型が提案されている。

いわゆる「アルタイ諸語」、すなわち、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族に属する諸言語に特徴的に見いだされる言語類型 (linguistic type) をいう。これらの3語族は構造的にはよく似ているが、基礎語彙に、厳密な意味での比較言語学的対応はみられない。

(中略)

このような構造は、語または要素(形態素)が一定の「連辞関係」に従って、一定の配列の中にそれぞれの位置をもち、それが文法機能を果たしているのである。そこで、これらの言語の類型を「アルタイ型」と称することにしたい。このような類型的特徴を示す言語は、存外、多い。いわゆる「アルタイ諸語」、日本語、朝鮮語、旧アジア人のニブフ語などは、みな、この「アルタイ型」の言語である。さらに、インドの原住民ドラヴィダ語族もそうであるし、その影響で、現代のインドのアーリア族(印欧語族)の諸言語にも述語動詞を文末におくという特徴がみられるので、ときに「インド・アルタイ諸語」(Indo-Altai)と称することもある。

亀井・河野・千野(編)(1996: 28-29)

河野(1989)には、さらに次のように述べられている。

印欧型の言語が範例的な(paradigmatic)言語であるのに対し、アルタイ型の言語は、連辞的な(syntagmatic)言語であると言うことができるであろう。

(中略)

なお、類型の名称としては、抽象的な名前よりも、「アルタイ型」とか「印欧型」というような固有名詞を用いる方がよい。類型は、本来、個体を離れたものではないからである。

河野(1989: 1577)

ただ残念なことにこれ以上の記述は無く、「アルタイ型の言語類型」とはより具体的にはどのようなものであるのか、まだ十分に明らかであるとは言えない。この「アルタイ型の言語類型」とは、いうなれば**日本語の類型**であり、すなわち本書はその解明を目指して重ねてきた研究の現段階での途中報告ということにもなる。

以下には本書の各章を紹介し、本書の構成を概観する。

「第0章 アルタイ諸言語の分布と系統」：この章は本書の理解に必要な背景知識として、新たに書き下ろしたものである。地図を示してアルタイ諸言語の話されている地域と、その構成や歴史、系統に関する諸問題について概説している。

「第1章 ことばの癖いろいろ」：この章は一般向けの雑誌に書いたもので、本書の9章、11章、14章、18章の内容を簡潔にまとめた紹介である。本書の導入として読んでいただければ幸いである。

「第2章 日本語の類型について」：2つの言語が類似している場合、その原因には系統／接触／類型という3つの理由が考えられる。この章はそのそれぞれ観点から日本語と他の言語との類似を考察した先行研究を整理し、その吟味を行ったものであり、日本語の類型を考えていく出発点となった論文である。

「第3章 アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について」：上記の河野先生による言説にあったように、日本語のタイプの中心的な特徴がSOVで修飾語先行の語順（もしくは主要部後置の語順）であることは誰しも認めるところである。ではその語順特徴と必然的に結びついている他の特徴とは何だろうか？ どのような理由からそうした一連の諸特徴は主要部後置語順からの必然的帰結として導かれるのだろうか？ この章もまず日本語の類型の全体像を把握することを第一の目標としているが、さらに日本語タイプの言語の引用節における直接話法と間接話法の連続性という個別のテーマについても深く考察を行っている。

「第4章 日本語（話しことば）は従属部標示型の言語なのか？」：「日本語の文の骨組みを決めているのは格助詞である」と一般に考えられている。しかし口語では名詞にガもヲもつかないことが多いばかりか、そもそも主語の名詞項も目的語の名詞項も現れないことがよくある。この章では映画のシナリオの分析に基づく帰納的検証を通じて、日本語は実は従属部標示型の言語ではなく、「暗示型主要部標示型」の言語であることを示している。

以下の章ではより個別な文法現象を取り上げているが、まず5章、6章、7章、8章では数、場所表現、無生物主語、再帰代名詞といった名詞類に関する文法現象を扱っている。

「第5章 アルタイ諸言語における複数形式の定性について」：「その病院では看護婦を探している」という文は看護婦の募集と解釈されるが、「その病院では看護婦たちを探している」となると、「看護婦たち」は特定の看護婦ということになり、何人かの看護婦が病院から失踪してそれを探している、というように解釈される。つまり日本語において複数の標示形式である-タチは特定性と結びついているわけだが、朝鮮語やアルタイ諸言語ではどうなのだろうか？ すなわちこの章はアルタイ型言語における複数の標示形式の対照を行ったものである。

「第6章 アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」：道に迷った時、日本語であれば「ここはどこ？」と言うが、英語では‘Where are we?’と

言うだろう。英語における「場所」はあくまでも副詞的に表現されるが、日本語では統語項として扱われ得る。他のアルタイ型言語ではどうなのだろうか？ 分析していくと、「場所表現」がもっとも名詞的に行われるのは日本語で、アルタイ諸言語では後置詞的、副詞的に行われる傾向のあることが明らかになる。

「第7章 地域的・類型的観点からみた無生物主語について」：高校の英作文で習ったように、英語では無生物主語の他動詞文がふつうにみられるが、日本語では不自然であり、他動詞主語を原因などにした自動詞文にして訳しなさい、などと言われる。つまり‘A stomachache kept me from going out.’を「お腹が痛くて私は出かけられなかった」と訳すようなケースである。この章では朝鮮語やアルタイ諸言語を含む13の言語について調査を行って、世界の諸言語において無生物主語の他動詞文はどの程度生じるのか、その表現の成立の理由や背景は何か、ということ調査・分析している。

「第8章 アルタイ諸言語と朝鮮語、日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究」：「ティムはベンが自分を批判すると思った」のような日本語の文において、「自分」はティムを承けることもベンを承けることもできるが、英語の‘Tim expected Ben to criticize himself.’においては Ben しか受けられないという。日本語では「自分」が1人称代名詞や（関西弁では）2人称代名詞のように使われることもある。欧米の印欧語などでは‘I stretched myself out on the bed.’のような中動的な再帰表現が発達しているが日本語はそうではない。このようにさまざまな違いのみられる「再帰代名詞」というものは、日本語以外のアルタイ型言語においてどのような振る舞いを示すのだろうか？ それは日本語に似ているのか似ていないのか？ この章はこうした再帰代名詞の振る舞いを追求したものである。

9章、10章、19章、20章では、感情述語、命令形の反語用法、モダリティ、証拠性という動詞に関わる文法の諸問題を扱っている。

「第9章 アルタイ型言語における感情述語」：日本語の感情述語に人称制限のあることはよく知られている。‘I am happy.’も‘He is happy.’も「私はうれしい」も問題ないが、「??彼はうれしい」は変で、「彼はうれしがっている」のように表現される、という問題だ。では他のアルタイ型言語にもこうした制限があるのだろうか？ 逆に制限のない言語はどこに分布するどんな言語なのか？ こうした制限に対する説明の1つとして「情報のなわ張り理論」によるものがあるが、他の言語もこれによって説明が可能なのだろうか。この章ではアルタイ型言語を含む7言語について感情述語の表現を対照している。

「第10章 アルタイ型言語における命令形の反語用法・条件用法について」：「うそをつけ」は命令形だが、実際は禁止の表現である。さらに-テミルを使えば、「そ

んなことをやってみろ、たいへんなことになるぞ」と他の動詞でも類似の反語表現を作ることが可能である。朝鮮語にもこうした表現のあることが指摘されており、モンゴル語にもあることがわかった。さらに他のアルタイ型言語にもこのような表現はあるのだろうか？ ある場合にこうした表現の成立する基盤や条件となっているのはどのようなことだろうか？ この章はこうした命令形の反語用法をめぐる問題を調査・研究したものである。

さらに次の11章、12章、13章、14章、15章、16章も動詞の諸形式を扱っているが、それぞれ相対テンス、条件表現、補助動詞、条件と継起の連続、言いさし、主要部内在型関係節、といった複文に関連する文法現象を扱っている。

「第11章 対照言語学的観点からみた相対テンスについて」：「ロシアに行く時に帽子を買った」では文全体は過去のことだが、太字下線の動詞は非過去形であり、「名前を書いた紙を持って来てください」では文全体は未来のことであっても太字下線の動詞は過去形で現れている。日本語におけるこうした現象には「相対テンス」という説明がされていて、英語における時制の一致のような文法規則とは全く異なったものであるという印象を受ける。では他のアルタイ型言語ではこのような複文におけるテンスの管理はどのように行われているのだろうか？ この章ではトルコ語、モンゴル語、ナーナイ語（ツングース諸語）の複文における時間表現を調査・分析している。

「第12章 ナーナイ語の複文について」：日本語には一般にト・バ・タラ・ナラと呼ばれる4つの条件表現の使い分けがあるとされている（戦うと勝つ／戦えば勝つ／戦ったら勝つ／戦うなら勝つ）。方言による使用頻度の違いもあるが、それぞれの条件形式にはそれぞれに独自の特徴とそれぞれが使われる典型的な環境・文脈があるとも指摘されている。一方、ナーナイ語にも3つの条件形式があり、日本語の諸形式ともきわめてよく似た使い分けを示す。この章では両言語のこうした条件表現を対照し分析結果を示している。

「第13章 アルタイ型言語における「補助動詞」の分布について」：日本語には-テミル、-テオク、-テシマウ、-テアゲル、-テモラウ、-テイク、-テクルなど、いくつかの補助動詞があってそれぞれ独自に文法化した機能で使われている。では他のアルタイ型言語にはいくつか、どれぐらいの補助動詞が観察されるだろうか、もしくは観察されないだろうか？ その使用には地理的な偏りやその背景となる言語接触による（相互）影響などが存在しているのだろうか？ この章では北東アジアを中心とし、広くユーラシアにおける補助動詞の分布状況を調べ、その地理的・類型的背景を研究している。

「第14章 条件と継起の連続性について」：「窓を開けると、海が見えた」とい

う文は、すでに起きたできごとを示すので、事実条件文と言われる。-トを用いているが、英語で if を用いて訳すことはできない。一方、「?窓を開けて、海が見えた」は何か不自然だ。アルタイ型言語の条件形式でも事実条件文は言えるのだろうか？ 言えるのなら、日本語やそのような言語で事実条件文の成立の背景となっているのはどのような特性なのだろうか？ この章では朝鮮語やアルタイ諸言語における条件と継起の連続／不連続を分析している。

「第 15 章 アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」：アルタイ型言語では語が一定の「連辞関係」に従って、それぞれの位置をもち、文法機能を果たしているという。英語などでは、もっぱら定動詞による節を接続詞でつなぐなどして複文を構成しているのに対し、アルタイ型言語では連体形や（広義の）連用的な諸形式を多用する。それらは「準動詞」とも呼ばれる。アルタイ型言語で準動詞が多用されるわけは何か？ アルタイ型言語の内部での準動詞の性格はみな共通しているのだろうか？ 他方、準動詞で文が終わることもあり、これは「言いさし」(insubordination) と呼ばれている。この章はこうしたアルタイ型言語における準動詞と言いさしを研究したものである。

「第 16 章 アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」：「皿の上にあったリンゴを食べた」のような文が主要部外在型関係節構文と呼ばれるのに対して、「リンゴが皿の上にあったのを食べた」のような文は主要部内在型関係節構文と呼ばれる。こうした内在型の関係節は動詞文末語順で主語の出現が任意である言語にしか生じないとされている。つまりはアルタイ型言語にしかないということだ。これは本当だろうか？ その実態はどのようなだろうか？ その理由は何か？ この章はアルタイ諸言語と朝鮮語、日本語における内在型関係節の実態を調査し、その成立の理由を考察した論考である。

「第 17 章 コピュラ文の諸相」：この章だけは他の章とやや性格を異にしている。動詞述語文に比べ、名詞述語文／形容詞述語文の研究は遅れている。これは英語にはコピュラ動詞があり、名詞述語文も形容詞述語文も結局動詞述語文の下位分類として位置づけられてしまう点に原因があるものと考えられる。そこで本章では世界の言語のコピュラ文を 4 つに分類にする基準を提案し、コピュラ文についての類型論を展開している。

「第 18 章 語順と情報構造の類型論」：この章は情報構造を分析の軸として、SVO 型言語と SOV 型言語のそれぞれにおいてその基本語順と内的に関連する 7 つの傾向を明らかにしたものである。

「第 19 章 アルタイ型言語におけるモダリティの意味領域地図について — 「ナル」表現の文法化にも注目して—」：モダリティはもっとも難解な文法範疇であり、

研究者によって定義も異なれば、そこに含める文法形式も異なる、といった状況である。ただモダリティを構成するとされる諸要素の中には意味的に近接していると考えられるものがあり、それは別の言語では同じ形式で示されていたりするので、言語間の対照を行うことによりその相対的な位置関係が見えてくる。本章ではこうした手法により、モダリティの意味領域地図を作成・提案した。日本語では禁止表現「～してはならない」に動詞「ナル」が用いられているが、アルタイ諸言語や朝鮮語でも用いられている。本章ではその現れる範囲も意味領域地図によって示している。

「第20章 東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究」：日本語古文のケリとトルコ語の-mIş が間接証拠性を示す形式であることは広く知られている。しかしハルハ・モンゴル語やツングース諸語にも証拠性と関連する形式のあることはあまり知られていない。一方で（日本語を含め）証拠性一般については近年急速に研究が進んでいる。本章では古文や方言を含む日本語とアルタイ諸言語、朝鮮語の間接証拠性を広く観察し、それらの言語における（間接）証拠性の意味範囲や特徴、他の文法カテゴリーとの関係を対照的な観点から再考した。

「第21章 八丈型基層言語と日本語の重層性」：この章も他の章とはさらに性格が異なっている。まずその内容は2021年秋の日本言語学会のワークショップで発表したもので、本書で初めて活字にしたものである。日本語の類型ではなく、日本語の成立過程について歴史的・方言地理学的観点からその重層性を主張したもので、さらに現代日本語諸方言のアクセント分布に関して言語外現実の観点から1つのシナリオを仮説として提示したものである。

このように本書の各章ではかなりさまざまな対象、さまざまな視点から日本語と日本語以外のアルタイ型言語を対照している。言語研究者は一般に自分の関心の深いテーマのみを扱いがちで、言語全体を扱おうとする研究者は少ない。しかし言語というものは全体が連動している1つの共時的なシステムであって、その全体の連動こそがその言語の「類型」というべきものだろう。したがってさまざまな角度からその言語の全体像を把握しようとするのが重要であると筆者は考えている。

人間誰しも直接自分の姿を見ることはできないように、日本語母語話者にとって日本語がどんな言語であるのかを知ることはある意味で非常に難しい。しかし、日本語とはかなり違う言語と比べたり、逆に日本語とよく似た言語と比べたりすることを重ねていくと、日本語の類型というものが見えてくる。

日本語の類型を考えるにあたっては、さらに日本語内部の諸方言や、古文に関

してもでき得る限り目を配ったつもりである。

8章の再帰代名詞や、16章の主要部内在型関係節に関しては、英語学や生成文法分野で蓄積されてきた知見をヒントにさせていただいた。

ただ上記のような各文法現象のそれぞれを専門とされている研究者や、各言語や各方言を専門にされている研究者の方々、各理論を専門とされている研究者の方々から見れば、不十分な記述も多々あるに違いない。本書を世に問うことによって、忌憚のない御意見等を伺えれば幸いである。

なお本書を通じ、ハルハ・モンゴル語の翻字は以下のような方式に拠っている：
 a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, e = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, o = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, шц = šč, ъ = ’, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja。

本書で単に「ウイグル語」としたものは、現在中国新疆ウイグル自治区を中心に分布する言語（庄垣内 (1989b) のいう「新ウイグル語」）を指し、イスラム化以前にウイグル民族の手で書き残された文献の言語（庄垣内 (1988) のいう「ウイグル語」）は、本書では「文献ウイグル語」と呼ぶことにする。朝鮮語におけるハングルからの翻字は章によって河野 (1955) の方式によるものと Yale 式によっているものがあり、章ごとにことわっている。例文の適格性の判断をどう捉えるかは難しい問題であるが、本書において*は非文であることを、?はやや不自然であることを、??はかなり不自然であることを、#は意図したものは別の意味になってしまうことを示すものとする。母音調和による異形態の標示方法、モンゴル語の動詞の語幹と挿入母音の取り扱い、朝鮮語の翻字方法や各言語のグロスなどについては、章間での目的の違いやスペースの問題等もあり、本書全体を通じて必ずしも十分に統一ができていないことをおことわりしておく。なお、図版について、他の文献から引用転載したもののうち、元版の状態やスペースの都合から、文字の判別しづらくなっているものがいくつかある。これらについては引用元の文献を必要に応じて参照いただきたい。口絵 1 には「世界文法構造地図 WALS (The World Atlas of Language Structures (WALS Online))」のデータをそれぞれ利用させていただいた。第 21 章の図 21.8 の元の図は『日本語地図』データベース (LAJDB) によるものである。記して感謝申し上げたい。

初出一覧

第 0 章：書き下ろし

- 第1章：(2018) 『日本語学』 37-1. 4-13. 明治書院
- 第2章：(2014) 『北方言語研究』 4: 157-171.
- 第3章：(2020) 『北方言語研究』 10: 17-40.
- 第4章：(2015) 『国立国語研究所論集』 9: 51-80.
- 第5章：(2021) 『東京外国語大学論集』 101: 17-36.
- 第6章：(2019) 『北方言語研究』 9: 41-65.
- 第7章：(2016) 『北方言語研究』 6: 81-110.
- 第8章：(2018) 『北方言語研究』 8. 1-36.
- 第9章：(2013) 『北方人文研究』 6: 83-101.
- 第10章：(2018) 寺村正男（編）『言語の研究』水門の会特刊叢書 1-19.
- 第11章：(2013) 『北方言語研究』 3: 175-199.
- 第12章：(2011) 『北方言語研究』 1: 115-138.
- 第13章：(2021) 『北方言語研究』 11: 123-152.
- 第14章：(2017) 『北方言語研究』 7: 35-68.
- 第15章：(2012) 『北方言語研究』 2: 139-162.
- 第16章：(2017) 『北方人文研究』 10: 3-33.
- 第17章：(2012) 影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望② 意味と構文』
85-106. 東京：くろしお出版
- 第18章：(2019) 竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』
143-178. 東京：くろしお出版
- 第19章：(2021) 『東京外国語大学論集』 102: 31-48.
- 第20章：(2022) 『北方言語研究』 12: 113-145.
- 第21章：書き下ろし